



Wall Streetの影の会社

事業とその魂

事業は資本から生まれるのではない。

ひとつの意図から生まれる。

誰かが、あるものが存在すべきだと決める。その意志こそが最初の本当の株主だ。誰かが金を数えはじめるより前の。

そのものは、ひとたび形をとれば、いつでも製品と呼ばれる — サービスと呼ばれるときでさえ。

そのあとに続くものはすべて — 構造、階層、貸借対照表、ブランド — 足場だ。

足場は家ではない。家とは目的のことだ。

そして目的は、ひとりでの運営されはしない。誰かがそれを担いつづけ、最初の決断がなぜ下されたのかを覚えつつけているあいだけ、生きのびる。

その意志が消えた瞬間、事業は動きつづけるが、もうどこへ向かうのかを知らない。作りつづけるが、もう誰のためなのかを知らない。生きてはいないまま、効率的になる。

これが多くの組織の静かな危機だ。資源の不足ではない。記憶の不足である。

製品は必要への答えであることをやめ、存在しつづけるためにただ売りつづけなければならない構造の、言い訳になる。

これは、何かの一部を所有しながら、その実体の全体を一度も目にしない人のために書かれている — 大小の株主たち。数字を受け取り、その背後にある物語はめったに受け取らない人たちだ。

小株主は、この仕組み全体のなかで最も静かな不正義である。

ビジネスのリスクは丸ごと分かち合う — うまくいかなければすべてを失う — それなのに、決める力の本当の分け前は一度も与えられない。

分かち合うのは賭けであって、カードを切る手ではない。紙の上では所有者。実質は観客。

これはどれも、資本主義への、事業への、利益そのものへの告発ではない。記憶への呼びかけだ。

これらは道具だ。きわめて強力な道具で、自らの起源に忠実でいるかぎり本物の価値を生み出すことができ — それを忘れれば、意味を失って空っぽになることもある。

どんな法改正も、どんな新しい貸借対照表の指標も、どんな新しい倫理認証も、ただひとつの本当の守りに取って代わることは決してない。あらゆる構造のなかにいて、なぜと問いつづける誰か、である。

株主が持つ持ち分とは、ずっと昔に誰かが、この世に生み出すほど強く望んだ、人間の意図の一部だ — どの配当の背後にも、誰かのために考え出された製品があり、それを丹念に作った従業員がいて、それを信頼することを選んだ顧客がいる。

これはいまでも、生まれたときの理由のために存在しているのか。それとも私は、知らないうちに、その影に仕えているだけなのか。

フェルディナンド・フレーガ

BLADEFREGA

Wall Street サーガ